

問一

紛	㊦	膨大(彪大)	㊧	鑑	㊨	担(荷)	㊩	洞察	㊪
---	---	--------	---	---	---	------	---	----	---

問二

「ことばの使い方」のセンスとは、無限のバリエーションが可能な表現において、単語文法、表記の統合の上に知識を組み合わせて思考したものと、自分の立場や伝える相手によつて的確に表現できる能力。

問三

ことばと状況、文脈に応じて的確に使うことば力は、良質の読書によつて培われた単語や表現を想起し様々な文を作り比較する経験を積み重ねて徐々に育っていくものである。しかし、スマホやパソコンに頼る文章作成では、深い認知処理を必要とせず定型文と書くことが可能となり、ことば力が育つ機会が奪われるから。



二

問四

思返しとは、恩人が不幸に陥る事態を暗に期待する上に、純粋に感謝し畏敬すべき近藤夫人との温かな人情に基づく関係を、世俗的で対等な損得勘定に基づく関係に変質させてまで、自らの負い目の解消を求める行為だという意味。

問五

ア

a

イ

b

問六

突然に妻や母親である近藤夫人を亡くした遺族の悲しみの深さには及ばないものの、会葬者が社交上の義理から装う皮相な悲しみとは無縁な、経済面精神面で数年来ただ一人自分を支えてくれ、その恩恵への感謝を純粋に抱き続けたいと願う夫人を失った讓吉の、自分でも抑えられない心底からの悲しみ。



問七

(1) 女「元の妻」

(2) 長年連れ添った夫が、心移した新妻のもとへ、家財を持ち去ったこと。

問八

(2) これからはこの家にやって来ないだろうね

(3) どうして、私がこちらに参上しないだろうか、いや、きっと参上する。

(4) もし私がご主人様に伝言を差し上げるならば(おまえが)申し上げてくれないか。

問九

(1) ふね

馬ぶねと舟

まかぢ

人名の真稱と舟の楫

うき

浮きと憂き

(2) 今日から私はつらく漂うような世の中をどのように過ごしたらよいか

問十

新妻のもとへ家財一切を運び去る夫の冷酷な仕打ちに対しても、少しも取り乱さず不平も言わずに歌のみを贈る、自制の利いた風流な態度と、それとは裏腹に歌に詠んだ、頼みとする夫の不在を限りなく不安に思う心情。



問十一

ア

問十二

則ち王者の貴ぶ所に非ざるなり。

問十三

エ

問十四

(1) ここをもつて

(2) イ

問十五

人民を治める方法には王者の則る教化、覇者の則る威嚇、強国の則る脅迫といったものがあり、最後の手段として刑罰があるが、聖王と言われる為政者はあくまで栄誉と恥辱の区別を明確にして人民を徳によつて教え導くからこと、人民は家庭内や夫婦関係をうまくまとめる義礼を尊び貪欲を戒めるといふこと。

